

# なつかしまれた人

小川未明

青空文庫



町の運輸会社には、たくさんの人たちが働いていました。その中に、勘太というおじいさんがありました。まことに、人のいいおじいさんであって、だれに対してもしんせつであつたのであります。

若いものたちがいい争ったりしたときは、いつもおじいさんが中にはいつて 仲裁をしました。

「まあ、すこしのことでそんなに怒るものではない。ここに働いているものは、いわば兄弟も同じことだ。たがいに力になり、助け合うのがほんとうなのに、争うということはない。すこしくらい腹がたつことがあつても忘れて、仲よくしなければならぬ。」といいました。

おじいさんに、やさしくいわれると、だれでもなるほどと思わずにはいられませんでした。そして、自分たちのしたことがまちがっていたと気づくのであります。

おじいさんは、また仲間が、病気にでもかかると、しんせつにしてやりました。自分の家を離れて、他人の中で病気にかかつては、どんなに心細いことだろう、そう思つて、できるだけしんせつにしてやったのであります。

こうした、おじいさんのしんせつは、みんなに感じられたので、いつか自分の親のように思ったものもあれば、またいちばん親しい人のごとく考えたものもあったのでした。

「おじいさんの生まれた国は、どこですか。」と聞いて、聞いたものがあります。けれど、おじいさんは、答えずに、ただ遠い国だとばかりいっていました。

また、おじいさんには子供や、身頼りのものがあるかしらんと、そのことを聞いたものもあります。すると、おじいさんは、さびしく笑いながら、

「やはり、おまえさんくらいな、いいせがれがあるが……。」と、答えたのでした。

そんないいせがれがあるのに、どうして、こんないいおじいさんが旅へ出ているのだろう、なぜ親と子がいつしよに暮らすことができなのか……。おじいさんは、この年になつて、自分の故郷を離れていたら、さびしかろうと思つたものもありました。

「おじいさんは、なぜこうして旅へなど出ているんですか。」と、若者の中の、一人は、その理由を知りたいと思つて問いました。

おじいさんは、自分の身の上のことについては、なにを聞かれても、ただ笑顔を見せて、あまり語らなかつたのであるが、

「自分の手足がきいて、働かれる間は、だれの世話にもなりたくないと思つてな……。子

供<sup>ども</sup>たちのそばにいて働<sup>はたら</sup>いたのでは、子供<sup>こども</sup>たちが、心配<sup>しんぱい</sup>すると思<sup>おも</sup>って、それで旅<sup>たび</sup>へ出<sup>で</sup>てきたのだ。」と、いったのでありました。

みんなは、はじめておじいさんの心<sup>こころ</sup>持ちがわかったような気がしました。子供<sup>こども</sup>たちに対<sup>たい</sup>しても、そうしたやさしい心<sup>こころ</sup>をもつのであるから、自分<sup>じぶん</sup>たちに対<sup>たい</sup>しても、やはりこうしてやさしいのであらうと思<sup>おも</sup>いました。

「じゃ、おじいさんは、いつかまた国<sup>くに</sup>へ帰<sup>かえ</sup>んなさるときがあるんですね。」

「それはあるにはあるが、そうすると、こうして仲<sup>なか</sup>よくしているみんなに別<sup>わか</sup>れなければならぬ。考<sup>かんが</sup>えると、そのことがつらいのじゃ。」と、おじいさんは、長<sup>なが</sup>い間<sup>あいだ</sup>、苦<sup>く</sup>辛<sup>しん</sup>をしてきた、日<sup>ひ</sup>にやけて、しわの寄<sup>よ</sup>つた顔<sup>かお</sup>をしやくるようにして、小<sup>ちひ</sup>さな目<sup>め</sup>をしばたいたのです。破<sup>やぶ</sup>れた鳥<sup>とり</sup>打<sup>うち</sup>帽子<sup>ぼうし</sup>の下<sup>した</sup>から見<sup>み</sup>える髪<sup>かみ</sup>は、もう灰<sup>はい</sup>色<sup>いろ</sup>になっていました。

この言葉<sup>ことば</sup>をきくと、若<sup>わか</sup>いものたちも、ほつと歎<sup>たん</sup>息<sup>そく</sup>をつきました。

「俺<sup>おれ</sup>は、自分<sup>じぶん</sup>の父<sup>ちち</sup>親<sup>おや</sup>のように思<sup>おも</sup>っているのだが、おじいさんと別<sup>わか</sup>れるのはつらいな。」と、いったものがあります。

「ほんとうにそうだ。まあ、おじいさん、いつまでも俺<sup>おれ</sup>たちといっしょにいてください。」と、いったものもありました。

こうして、勘太じいさんは、この会社かいしゃに働はたらいている若い人わかひとたちから、愛あいされています。  
た。

おじいさんは、よく働はたらきました。みんなの間あいだにまじって、いっしょになって重い荷おもも運はこべば、またかついだりしました。たとえ、年としをとっていても、仕事しごとのうえで、若いものわかに負まけることはなかったが、若いものわかは、なるたけ、この年としをとった、しんせつなおじいさんまをいつもいたわつていたのであります。

こうして、働はたらく人々ひとびとの社会しゃかいには、美うつくしい人にんじょう情なの流ながれる、明あかるいところがありました。そして、またこうしてしんせつなおじいさんが、だれか一人ひとり、若いものわかの中なかにいなければならなかったのは、ちようど、人間にんげんの社会しゃかいばかりでなく、他の獣物けものの集まりあつの中なかでも、経けい験けんに富とんだ、年寄としよりがいて、野原のほらから、野原のほらへ、山やまから、山やまへ旅たびするときには、その年としとつたのが道案内みちあんないとなつて、みんなが、あとからついてゆくのと同じおなでありました。

勘太じいさんは、毎日まいにち、みんなといっしょに働はたらいていました。しかし、ついに、みんなから別わかれていかなければならぬときがきました。しかも、それは不意ふいであったのです。

おじいさんの息子むすこが、田舎いなかで成せい功こうをして、はるばるおじいさんを迎むかえにきたのであり

ました。

「おじいさん、長い間、苦勞をさせまして申しわけがありません。私は、このほど、ようやく仕事のほうが都合よくいくようになりましたから、もうこの後おじいさんに苦勞をかけることもないと思つて、迎えにまいりました。弟や、妹たちは、はやくおじいさんの顔を見たいと待つていますから、どうかすぐに私といつしよに帰つてください。」といいました。

おじいさんは、息子の成功をしたというのを聞いて、どんなに喜ばしく思つたかしれません。どんなに、久しぶりで、子供や、孫たちにあわれるのをうれしく思つたかしれません。けれど会社にいるみんなから、しんせつにされているのを、別れて帰らなければならぬかと思つと、またかぎりなく悲しかったのであります。

「それは、まあなによりうれしいことだ。」と、口には、いいながら、おじいさんは、自分の着ている半纏や、汚れて土などのついている股引きを見ながら、すぐに帰ろうとはいわずにちゆうちよしていました。

息子はもどかしがつて、

「おじいさん、さあ早く帰りましょう。会社の汽車にまにあわせたいものです。なにを

かんが考えていなさるのですか。こんなに汚れた半纏や、破れた帽子や、土のついた股引きなどは、もう用がないのですからお脱ぎなさい。そして、私がここに持つてきた、新しい着物にきかえて、早くここを出かけましょう……。」「といいました。

おじいさんは、長い間、自分の身につけていた仕事着を未練惜そうに脱ぎながら、

「せっかくそういって、迎えにきてくれたのだから、どうしても帰らなければならぬまい。俺はまだ、もうすこしくらいはここにいて、働いていたいだけ……。」「と、独り言のようにもらしていました。

おじいさんは、新しい着物にきかえて、自分のいままで身につけていた半纏や、股引きや、破れた帽子をひとまとめにして、そばにあつた、貨物自動車の荷の上に乗せておきました。

「さあ、おじいさん、仕度がすんだら、すぐに出かけましょう。」「と、息子はいいました。おじいさんは、そこに居合わせた、仲間に別れを告げました。すると、その人たちは、「おじいさん、あんまり急じやないか。名残惜しいな。しかし、めでたいことで、なによりけつこうだ。無事に暮らさつしやい。」「といいました。

「さよなら。」「



「達者で暮らさつしやい。」

仲間は、口々にいつて、おじいさんの出でゆく姿を名残惜しそうに見送っていました。

それから、みんなは、また、自分たちの仕事にとりかかって忙しそうに働いていました。

このとき、一台の貨物自動車、会社社の門から出て、町を過ぎ、ある田舎道にさしかかったのであります。車の上には、世帯道具がうずたかく積まれていました。

もう、やがて春になるうとしていたが、まだ寒い風が、野や、林を吹いていました。雲切れのした、でこぼこのある田舎道を貨物自動車は、ちようど酔っぱらいの人の足どりのように、躍りながら、ガタビシといわせて走っていたのでした。たぶん、ある家の引越しでもあるとみえます。車台の上では、机が、いまにも道端へ飛び出しそうになるかと思うと、箱が、いまにも転がって落ちはしないかと見られました。それでも、それらは、車にしがみついて乗せられたまま走っていました。ちようど、そのとき、なにかしらない別のものが、道の上に落ちたのです。自動車は、そんなことには気づかず、そのまま走り過ぎてしまいました。そして、さびしい道には、だれも見ているものはありませんでした。

車の上から、落ちたものは、勘太じいさんの会社を出るときまで身につけていた、半

纏んてんと股ももひ引きと帽子ぼうしでありました。おじいさんが、ひとまとめにして、荷にの上うえに乗のせておいたのが、そのまま走り出だして、ついに振り落おとされたのであります。

日暮ひぐれ方がたを告つげるからすが、あちらの林はやしの方ほうで鳴ないていました。

町まちの会かい社しゃでは、その後のち、みんなが思おもい出だしては、勘太かんたじいさんは、どうしたであろうとうわさしましたけれど、おじいさんからは、そののち、なんのたよりもなかったのです。そして、みんなからも、だんだん忘れわすられていこうとしました。

かれこれ一年ねんばかりもたつてからのことです。会かい社しゃで働はたらいている一人ひとりの若わか者ものが、ある日ひ、町まちから五里りりばかり、東ひがしの方ほうへ離はなれている街道かいどうを貨物自動車かもつじどうしゃで通とおつてくると、勘太かんたじいさんが、ここに働はたらいていた時分じぶんのようすそつくりで、とぼとぼと街道かいどうを歩あるいているのを見みたといいました。

おじいさんを知しっている人々ひとびとは、この話はなしをきくと目めをみはりました。

「それは、人ひと違ちがいだろう……。おじいさんは、息子むすこが迎むかえにきて、新あたらしい着物きものにきかえて帰かえつたのだから、また昔むかしのようすにかえるというはずがない。」と、あるものはいいました。

「いいや、勘太かんたじいさんに相違そういない。俺おれは、よほど、自動車じどうしゃを停とめて、声こえをかけようと

思つたが、急いでいたものだから、つい残念なことをしてしまった。」

「おじいさんを見て、自動車を停めないということがあるものか？」

「しかし、おじいさんなら、困れば、またここへやつてくるにちがいない。」

「いや、ああしていったん帰つたのだから、きまりわるがつているのかもしれない。人間

間の運命というものは、いつまたどんな境遇にならないともかぎらないからな。」

「俺、こんど見つけたら、無理にも自動車に乗せてつれてこよう……。」と、若者は

いったのであります。

ある日のこと、おじいさんを見たという若者は、また自動車に乗つて、その街道を走つていたのであります。

「いつか、この街道で、おじいさんを見たのだが、見つかつてくれればいいがな。今日ばかりは、おじいさんをつかまえてやろう。そこで、場合によつたら、自動車に乗せてつれてゆこう……。」と、前方をながめながら思つていました。

あちらに、森があつて、その下に人家の見えるところへ近づいたときに、若者は、行く手に勘太じいさんが、あの破れた帽子をかぶり、見覚えのある半纏を着て、股引きをはいて、その時分よりはずつと元気がなく、とぼとぼと歩いている後ろ姿を見たのであり

ます。

「おお、おじいさんがゆく……。」「といて、若者は、それに追いつくと自動車をとめました。」

「勘太おじいさんじゃないか？」と、若者は、わめきました。

おじいさんはたちどまりました。そして、うしろを振り向きました。

「勘太おじいさんじゃないか……。」「

「ああそうだ。」と答えました。

「おじいさんか……。」「といて、若者は、顔をのぞくと、いつのまにかひどくおいぼれて、両方の目が腐っていました。

「おまえは、どうして、そんなにおちぶれたい……。」「といて、若者はため息をついたのです。

「いろいろな不幸がつづいてな。」

「息子さんは、どうしたい。」

「死んでしまった。」

「それは！ おまえも不運なことだのう……。なぜ、また早く、町へ出てこなかったのだ

「町へ……。」

「これからゆくか？　もう、おまえに、そんな元気がないか？」

「ああ、ゆく。」——若者は、あまりに変わりがたがひどいので、どうしようかと思いましたが、みんなにつれていつて、おじいさんを見せやりたいような気もしました。

このとき、あちらから、若い女と、子供らがこちらへ駆けてきました。

「おらのおじいさんを、どこへつれていかつしやるつもりだ。」と、女は大きな声でいいました。

若者は、びつくりしました。

「町へ……。」

「町へ、なにしにき。だれがたのんだい。」

「俺は、勘太じいさんと、町でいっしょに働いたものだ。」

女は、あきれたような顔つきをして、

「勘太じいさんなんて知らない。うちのおじいさんは、もうろくしているで、働けやしない。」

「じゃ、人<sup>ひと</sup>違<sup>ちが</sup>いか……。この着物<sup>きもの</sup>はどうしたのだ。」と、若者<sup>わかもの</sup>はききました。

この貧乏<sup>びんぼう</sup>な、もうろくをしたおじいさんは、どこからか、捨<sup>す</sup>ててあつたのを拾<sup>ひろ</sup>つてきて、それを着<sup>き</sup>ていたということがわかつたのです。若者<sup>わかもの</sup>は、このおいぼれたじいさんが、勘太<sup>かんた</sup>じいさんでなかつたのをしあわせと思<sup>おも</sup>いましたが、またべつな痛<sup>いた</sup>ましい感<sup>かん</sup>じがして、そこを立<sup>た</sup>ち去<sup>さ</sup>りました。なにも知<sup>し</sup>らぬ子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>らはめずらしそうに、あちらを向<sup>む</sup>いて、自<sup>じ</sup>動<sup>どう</sup>車の遠<sup>と</sup>ざかりゆ<sup>お</sup>く影<sup>かげ</sup>を無<sup>む</sup>心<sup>しん</sup>にながめていたのであります。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集2」丸善

1927（昭和2）年9月20日発行

初出：「童話」

1926（大正15）年3月

※表題は底本では、「なつかしまれた人《ひと》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# なつかしまれた人

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>